



Data

監督・脚本：テレンス・マリック
撮影監督：エマニュエル・ルベツキ
出演：クリスチャン・ベイル/ケイト・ブランシェット/ナタリー・ポートマン

■■■ショートコメント■■■

◆『シン・レッド・ライン』（98年）でベルリン国際映画祭金熊賞を、『ツリー・オブ・ライフ』（11年）（『シネマルーム27』14頁参照）でカンヌ国際映画祭パルムドールを受賞したテレンス・マリック監督の最新作がコレ！しかも、クリスチャン・ベイルがケイト・ブランシェット、ナタリー・ポートマンらと共演している映画と聞けば、そりゃ必見！

そう思ったが、新聞紙評には「この新作では、難解というより、普通の意味での物語はもはや『ない』と言っていいかもしれない。」と書かれている。私は基本的に「その手の映画」は好きではないが、それでもやはり必見！そう思ったが・・・。

◆本作の撮影は『ゼロ・グラビティ』（13年）（『シネマルーム32』16頁参照）、『バードマン あるいは（無知がもたらす予期せぬ奇跡）』（14年）（『シネマルーム35』10頁参照）、『レヴェナント 蘇えりし者』（15年）（『シネマルーム38』54頁参照）で3年連続アカデミー賞撮影賞を受賞したエマニュエル・ルベツキだそう。たしかに、スクリーン上に見る映像美はすばらしい。しかし、主人公を演じるクリスチャン・ベイルをはじめケイト・ブランシェットやナタリー・ポートマンの語りは自問自答でセリフと言えるものではない。また、その言葉は抽象的で哲学的な問題提起ばかりだ。

本作には具体的なストーリーはないが、大枠のストーリー（？）はリッチな脚本家のリック（クリスチャン・ベイル）が仕事上でもいろいろと悩みながら、元妻・ナンシー（ケイト・ブランシェット）や人妻・エリザベス（ナタリー・ポートマン）ら6人の美女たちとの愛の記憶を語るものらしい。しかし、冒頭からラストまで同じようなトーンで抽象的かつ哲学的な問題が提起され、それに対する回答（？）らしきものが美しい映像の中で示されていく展開に、いささかうんざり・・・。

◆私はファッションショーなるものを見たことは1度もないが、そこでは抽象的な1つのテーマが決められ、それに沿って舞台上に登場するモデルたちの着る衣装や動きが演出さ

れているはず。本作はそれと同じで、テレンス・マリック監督が設定したいくつかのテーマに沿って、主人公のリックや6人の美女たちがさまざまな動きとポーズを決めているわけだ。しかし、私は別にリックと6人の美女たちのファッションショーを観にきたわけではないから、そんな展開がずっと続くと途中で居眠り状態になってしまうことに・・・。

新聞紙評では「物語を見ているというより、マリック監督自身の心情を延々と聞かされているような気になってくる。」と書かれていたが、私も全く同感。もともと、そこでは「この極めて個人的な物語を、ハリウッドを代表する俳優たちが演じているのは、何とぜいたくなことだろうか。」ときちんとフォローされていたが、私はこんな映画はノーサンキュー！

2016（平成28）年12月26日記